

『信卷』に於ける二師の引文

徳 永 大 信

(一)

『信卷』を別開するには、深い決心があり、その重要性を示すのが別序である。主として法然門下の問題を背景におきながらのべられ、とくに『浄土論』の一心の華文によって、信心の一心で往生する明証を得たのであるとのべてある。

親鸞聖人は、自分がその心を明かすに先だって、まづ信心というものをどう考えているかをあげている。

十二嘆名の中、まず最初に、曇鸞大師の「長生不死の神方」次に善導大師の「忻浄厭穢の妙術」があげられている。これは主として外道に対して「長生不死の神方」、聖道門に対して「忻浄厭穢の妙術」といわれている。このように、『信卷』の叙述は、信心の諸徳を列挙することから始まる。この十二句が「信卷」の最初に述べられてくるのは、これらの語句の明証として「信卷」は編集されているということも言えるのである。

それが歎名されたあと、三一問答の前には、かなりの長文の引文を出し、曇鸞、善導の文をあげるということは、少なくとも、三一問答の前提となっているということである。それらの文は、信心が機受の極要であることを示し、信証直接を建立し、趣入の要が信心にありということを示し、浄土門外の聖道門、外道ならびに浄土異流に対向するものとなっている。

とくにここで、浄土異流の多くが、善導、法然の念仏往生を以て、自力の称名往生と取っていたので、あくまでも、信心より流出した他力の称名であることを示さんとしたものであった。「化卷」の観経、小経、二経の隠顯釈が、三心の一異について問いを出し、信心の自力が隠顯二法門の根底にあることを示すことを見ても知られる。

してみると、『教行信証』の四法組織は、「化卷」所明の自力の要真二門を批判せんとするにありと云うことが出来、前五卷は真実を顯す巻であり、第六化身土巻は、非を簡ぶ巻と

いわれるのである。これをただ単に、方便の卷、破邪の卷だと解釈することは、必らずしも妥当だと言えない。如来の摂化の義が成ぜられ、聖道・要・真・外道の法門の如きも、すべて眞実法に入らしめんとする権用門の義を成ずるのである。

「信卷」には、二師の引文の引かれたあとに、すなわち、三一間答に入る直前の文に、

しかれば、もしは行、もしは信、一事として、阿弥陀如来の清淨願心之廻向成就したもう所に非ざること無し。因なくして他の因の有るには非ざるなり。知るべし。

と示されている。この文は、もとより『往生論註』の所説に基くものである。

(二)

しかるに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きにあらざ、眞実の信樂、まことに獲ること難し。何をもつての故に、乃至、如来の加威力によるが故なり、ひろく大悲広慧の力によるが故なり。たまたま淨信をえは、この心顛倒せず、この心虚偽ならず、ここをもつて、極惡深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり。

これとあきらかに対照的に出されてくる文が、第二十願の機は、専修にして、しかし雑心なるものは、「大慶喜心を獲ず」の文である。

大小聖人、一切善人、本願の嘉号を以て己れが善根とするが故に、信を生ずること能わずと決積されている。「信卷」の始めの難信の理由が転じて、そのまま獲信の理由となることを前後相応し、因果相通じているところに、不可思議の誓願の徳がある。このように考えると、「化卷」は「信卷」と対応するものである。

(三)

如実修行、不如実修行ということとは、この第十八願の眞信心が、如実修行であるならば、第二十願の「植諸徳本、至心廻向」ということは、不如実修行といふべきものであり、したがって、如実修行と不如実修行は、一つの信心の二面を顯わすものである。不如実修行を取り去ってしまうならば、如実修行も、無内容なものとなる。この如実・不如実ということがあつて、そこに果遂とか、転入ということが言えるのである。このことを明かすために、親鸞聖人は、「化身土卷」に、自己自身の信の歷程を明示されている。

天親は、その宗教的体験を一心の語をもつてあらわし、曇鸞は、それをうけながら不悖であり、不一、不相統の自己の信を告白する。「化身土卷」の末尾には、長々と外道批判とその教証をあげているのは、曇鸞によるのであるとも言える。長生不死という言葉自体、外道であるが、この外道思想

の根幹を把握している。

一心は、三不信と示すことによつて、自覚された一心であり、始めから、一心というのでなく、三不信の翻りとしての一心である。ここに始めて、曇鸞が天親の一心にあわれたと表現される。

(四)

三一問答の法義釈の問答を、親鸞聖人は次のように要約されている。

信に知んぬ、「至心」「信樂」「欲生」そのことばことなりといえども、そのころは、これひとつなり。何を以ての故に、三心、すでに疑蓋雜ることなし、故に真実の一心これを金剛の真心と名づく、金剛の真心を真実の信心と名づく。

真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり、この故に論主、建めに我一心と言へり、又、「如彼名義欲如実修行相応故」とのたまへり。

この曇鸞大師の問題提起の深い意義をくみとり、法義釈に結嘆されている。このように、曇鸞大師の「如実修行相応の一心には親鸞聖人自身も強く心をひかれていた。

浄土は、いかして、この世に悩む凡夫を救う所となるか、曇鸞は、このことを明らかにするために、浄土は本願の世界であり、仏力に住持されたものであることを広説している。

曇鸞はこれを、「称名憶念すれども、無明なお存し、所願を満さざるもの」と解説して、その理由を、「如来は、是れ、実相の身なり、是れ為物の身なりと知らざるに由る」と説かれ、これにより、浄土もまた一如平等という実相面と、二十九種の莊嚴の為物の面を具すものであることが知らされる。和讃には、

論主の一心と説けるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたもう

と嘆じてある。

(五)

次に善導大師に関してであるが、親鸞聖人が、伝承を重視された態度の文は、要文の類衆が主でありつつも、その態度のうちに、自らなる信の必然的な論理発展というものが存在しているのである。

信心の内容・心相に関して善導大師は、『散善義』に二種深信を示し、

決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、呌劫より己来、常に没し、常に流転して出離の縁有ることなしと信ず
決定して深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を攝受し、疑いなく、慮りなく、彼の願力に乗じて定んで往生を得と信ず
と示されている。

機の深信よりいえば、自身は絶対に救われない罪惡の存在であり、無有出離之縁の者である一面と、一方、如来の本願を頂く法の深信よりいえば、疑いなく、慮りなく、絶対に彼の願力によって救われて行くものである。

相溪順忍師によれば、浄土真宗の信心は、自己の向上的なものは全面的に否定し、しかも、如来の願力によって、まったく無条件で救われて行くものであるから、救済されていく一切の点において、自己否定をする態度となるべきものであると言われる。

なぜなら、大経深信として、常に諸仏の咨嗟として具現し、それが聖典の態をとって、教法となるものであるから、救済する如来の意志の具体的な表示である教法こそ、聖典である。その聖典に対する態度は、随順の態度となる。善導大師が、

唯、仏語を信じて、身命を顧みず、決定して行に依つて、仏の捨てしめたもうものは即ち捨て、仏の行ぜしめたもうものは即ち行ず、仏の去らしめたもう処をば、即ち去る。是れを仏教に随順し、仏意に随順すと名く、是れを仏願に随順すと名く、是れを真仏弟子と名く

とあり、この態度こそ、自力作善を徹底的に否定する態度であるというべきである。教法の前に無私の態度を以て、その語る所を静かに領納し、それに随順する。まったく自己の計

らいをはなれ、教法自身の顯現を受領するものでなければならぬ。

(六)

「化卷」の三願転入の文によると、今、特に選択の願海に転入したのは、まったく、論主(天親)、宗師(善導)の勸化であつたこと。教法によって、調熟されつつあるものであるから、機の味道の内容からいえば、教法自体の自己発展と見るべきである。

かかる立場に立つ時、不動の確信を以って『教行信証』の改点例がなされ、それは、単に流されるものでなく、深い統一連関を共に、そこには、一定の論理の存在することが知られる。

その意味で、『教行信証』は、御自釈の部分だけが、親鸞の文ではなく、引文全体が自己の思想大系を示す御自釈とみることができ。

親鸞聖人が、七祖聖教引用にあたって、一連の文を『教行信証』の前五巻の真実の巻に引用される場合、中間を乃至して、その部分だけを特に「化身土巻」に引用して、方便であることを明らかにされている。

七祖聖教引用のうち、その顯著なものは、『散善義』の三心釈の引文である。「信卷」で乃至され「化卷」に引用され

ていたり、「信卷」「化卷」兩方に引用される場合もある。

それは、深信釈の觀經深信と弥陀經深信とであり、觀經深信は、「信卷」と「化身土卷」に引用されて、弥陀經深信は「信卷」では觀經深信と一連に引かれている。

これは、親鸞聖人自身、この兩經には、真実、方便兩様の見方が生ずるのであるから、兩卷に引用されたものである。

善導大師では、一連の文とされていたものの中から自力心の間雜するものは、「化卷」に引用されている。

さらに、改点の中、約生の文を約仏の文に改点される。

『論註』の引文で五念門行は、行者の行ずる行であるのを、約仏に改点し、法藏菩薩の行とされている。

菩薩は、四種の門に入りて自利の行成就したまへり、知るべし、菩薩は、第五門に出て、廻向利益他の行成就したまへりと知るべし

とあるように『論註』の引文にはこの例が多い。

また、善導大師の『散善義』『往生礼讃』の引文にも、同一方針のものが多く、「須」の字は「すべからく……すべし」と読むのに、「すべからく」を「もちいる」と読ませ、約仏の文としている。すなわち『教善義』の至誠心釈の

一切衆生、身口意業の所修の解行は、須く^{すべからく}真実心中に作すべきことを明さんと欲う

の文を、「信卷」には、

『信卷』に於ける二師の引文（徳 永）

一切衆生、身口意業の所修の解行、必ず真実心の中に作したまへるを須いんことを明さんと欲う

と改点してある。同様のことが、「信卷」は、

凡そ施し給う所、趣求をなす、亦皆真実なり

と改点し、施為と趣求は、利他を自利を示すという一般的用語例ではなく、如来廻向の行を以て衆生趣求の行となす意味とされている。

(七)

以上、自力心によって修すると説くものは、すべて權方便とし、約仏の改点することによって、如来廻向のものと示された。そのことによって明かされることは、衆生の自力作善の否定であり、同時にその改点によって、衆生の罪惡の深さを示す文となってくるのである。

参照文献

- 桐溪順忍 救済の論理 教育新潮社
- 金子大栄 信卷講読 春秋社
- 曾我量深 信卷の諸問題 東本願寺出版部
- 石田充之 親鸞教学の基礎的研究 永田文昌堂
- 〈キーワード〉 難信、獲信、改点例

（九州龍谷短大教授）